



Title	〈品詞による中国文構造分析〉批判：大河内康憲先生に教を乞う
Author(s)	朱, 廣興
Citation	中国研究集刊. 1990, 9, p. 40-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60824
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈品詞による中国文構造分析〉批判

——大河内康憲先生に教えを乞う

朱 廣 興

一、品詞と文構造と

中国語のシンタクス（語順）について、大河内康憲（以下叙述の客観性のため敬称を省略する）は次のように言っている。

主語や述語にかかわる中国語のシンタクスの基本は「s・v (Adj)」や「s・v・o」である。たとえば、

他来。(他：かれ 来：来る)

他学中文。(他：かれ 学：学ぶ 中文：中国語)

のようになる。この順序が重要である。主格、対格といったものが語形にあらわれないから、ある名詞が述語動詞に対して主格の關係にたつか、対格となるかはまったく単語のならば順序によって示される。語順はほぼ英語とひとしく、述語動詞の前に主語、後に目的語ということになる。（「日中対照文法論——主語及びそれとかかわる問題」四七ページ・『日本語と日本語教育——文法編——』所収・文化庁・一九八五年）

つまり、品詞によって中国語の語順關係を考えると、「NV」や「NVN」となっているところから、構文としては「SV」や「SVO」が成立するという説明である。

このように、品詞によって中国語の文の語順を説明しようとするのは、もちろん大河内の説に端を発したものではない。言語学者、馬建忠が西洋の文法を模倣し、その品詞論を中国語文法に導入したのがきっかけであるようで、その後、この品詞論が修正されながら受け継がれ、現在、中国語文法体系の一環とされ、定着しつつあると言ってもよい。

すなわち、品詞論の存在が、〈品詞↓文の構造(統辭論)〉ということを可能にするとして、文法体系において中国語も英語などと変わりはないと主張されている。「各国の葛郎瑪 大抵相い同じ、ただ音韻と字形と同じからざるのみ」(二ページ・『馬氏文通』・一八九八年)という馬建忠の文法に対する基本認識は今日に至っても変わっていないと言えよう。

しかし、文の構造を説明するためであるという考えに基づい

て分類された中国語の品詞が、実際の文構造分析において、その役割を果たしているものであろうか。これは中国語に品詞が必要であるかという問題にも関わってくる。そこで「中国語の語順がほぼ英語とひとしく、述語の前に主語、後に目的語」と言われているその点から、基本的、且つ重要であるとされている「NVN」「NV」の語順における品詞の役割を考えてみたい。

二、品詞によって説明できない中文構造

前記の大河内の例文に限って考えれば、文の構造が品詞によって論理的によく説明されているようにみえる。

周知のように、中国語は、格の屈折(変化)や語尾変化や、日本文法に存在するような活用語などを持っていないので、各語は、ただ概念だけを表すところの、いわゆる孤立語である。この孤立語には、語順以外、日本語の助詞のような、語と語との関係を示すものは、ほとんど存在していない。したがって、文の構造関係を分析するのが品詞分類の目的であるとするならば、品詞配列が同じであるとされる語順のときは、当然、文として同じ構造であるべきである。

だから、もしすべての「NV」や「NVN」の語順が「SV」「SVO」の構造であるならば、品詞の役割の有効性や正確さなどが確認されることとなる。しかし、現実には、「NV」や「NVN」という形式であるにもかかわらず、「SV」や「S

VO」構造とされないものが数多く存在しているのである。ところが現行の中国語文法論では、品詞によって論理的に割り切れないこれらの文例に対して特別の名称を与えて「分類」するか「慣用語」として扱うか、いわば「例外」扱いで片付ける傾向が強い。(このことは後に詳しく用例を挙げて論じる)それのみならず、たとえば杉村博文が「(吹風)(晒太阳)のような語彙的、あるいは慣用語的色彩の強い表現について、その構成要素間の関係を意味論的に細かく詮索することがそもそも無意味であるという非難もまた甘んじてうけねばならないだろう。」(「吹風攷」・四九ページ・『日本語と中国語の対照研究』第十号日本語と中国語対照研究会編・一九八五年)と言っているように、例外とされているものに対する詮索さえも避けられていくようである。

とすれば、品詞によって説明しきれないという事実があるとすることは、むしろ逆に「品詞」がそれなりの役割りを果たしていないことを意味しているのではあるまいか。そこでまず、例外として扱われている文の場合の、その構造における品詞の役割を具体的に考えたい。

甲、「自然受動文」と分類されるもの

次の文例は「NV」でありながら、「SV」構造ではなくて、「自然被動句」という特別の名称を与えてそこに属させている

ものである。(以下例文・訳文の出拠はすべて注一に記す。本文ではページだけ例文の後に記入している。)

- 1 現在芸人の地位已經提高…… 一三一
- 2 いまでは、芸人の地位がすでに高められた……
 窓戸、桌椅、標語全弄好了…… 一三一
- 3 窓、机椅子、標語、みんなちゃんと準備ができました……
 窗子 開了。窓は、あけられた。 五二九
- 4 北京 解放了。北京は解放された。 五三一
- 5 松樹 倒了。松の木は倒された。 五二九
- 6 麦子 収了。麦は取り入れられた。 五二九
- 7 犯人 押走了。犯人は護送された。 五三一
- 8 電線 割断了。電線が切られた。 五三一
- 9 飯碗 打破了。茶わんが割られた。 五
- 10 苦難的人民、們都解放了。 三二三
- 11 海花的柴刀掉到懸崖下面去了。 三二三
 海花(人名)のなたががけの下におとされてしまった。

「自然被動文」すなわち自然受動文について大河内康憲は次のように説明している。

対格が主語の位置に立つ文を「受事主語句」とよぶが、受事

主語句はつねに「被字句」とは限らない。むしろ口語的には「被、叫」などをとらないほうが普通である。……対格の主題化は容易に成立するが、これらは主語との格関係からいえば受身文である。常用の例でいえば、次の「碗」は打破の対格である。(1)碗打破了。(茶碗が割られた)「被」をつけ、「碗被打破了」などというよりこのほうがよほど自然な中国語である。このような文は受身の形式をもたない受身文ということで「自然被動文」とよばれている。(『講座日本語学十卷』—外国語との対照I三二三ページ・明治書院・一九八二年)(注二)

さらに、この自然受動文の構造がどう理解されているかについて、張志公は次のように言っている。

「もし、主語と動詞が組合されることによって、おのずと受動関係をあらわすことができるならば、句中に受動をあらわすどんな方法もちいなくてよい。」(『中国文法基礎』一二九ページ・江南書院・一九五五年)

また潘金生は次のように説明している。

「受動の意味を表す特殊動詞も用いないし、次動詞の〈被〉も用いないで意味の上から明らかに受動文と考えられるものを内的受動文と呼ぶ」(『金田一春彦博士古稀論文集』五三一ページ・一九八四年・三省堂)・「現代中国語では、〈被〉を使う受動文は、次動詞の〈被〉によって受動の性格をもつのであるが、内的受動文の場合、次動詞の〈被〉を使わないにもかかわらず意味の上からやはり受動文と認められている。」(同前五

三〇ページ)

大河内はさらに例を挙げて次のように説明している。

信写好了(手紙は書き終えた。)

中国解放了。(中国は解放された)

電影已經看報了。(映画についてはすでに新聞でしらべました。)

これらの「信、中国、電影」は動作の主体ではない。「信、中国」などは論理関係からいえば「書き」、「解放する」対象であり、むしろ目的語である。……(『日本語と日本語教育』

—文法編一四八ページ・文化庁・昭和六十年)

すなわち、前記の諸例文には受動を表す形式がないにもかかわらず、「SV」構造でないときされている。いわば「NV」↓「自然受動句」↓という構造は、言語形式の上から違いが見られないから、品詞の代わりに「論理関係」によって説明されたということである。「論理関係」によって文の形式上、主語であるべきものが、実は、目的語であると考えられるので、「信写好了」「中国解放了」は、受動文とされるわけである。

右のような説に対して、私は、以下のように批判する。

まず、「おのずと受動関係を表すことができるならば」という張志公の言葉は非常に曖昧であると言わざるを得ない。なにを基準にして「受動関係であるかどうか」ということを判断す

るのであろうか。と言うことは、言語形式すなわち品詞によって判断することができないから、意味によって判断せざるを得ないことを言っているのではないか。

潘金生は、前引の文のように、はっきりと「意味の上から明らかに受動文と考えられる」と言っており、品詞によってその文の構造が確認されたわけではないことを示しているのである。

大河内は「論理関係」によって構造を分析しているようである。しかし、簡単に言えば、「論理関係」とは、「形式」によるのではなく、「意味」によって判断された、文における語と語との関係であると言えよう。

結局、「意味」が、品詞に代わって構造分析においてもっとも大切な根拠になっているのである。

前記の例文のように、見かけ上、受動を表す標識が何もないから、「意味」にたよらざるを得ないのは当然の結果である。この「意味」によって構造関係を判断する事実は大河内の説明からも裏づけられる。

a、妹妹 吃了。(妹が食べた。)

b、糖 吃了。(糖は食べた。)

c、魚 吃了。(魚が食べた。あるいは魚は食べた。)

「論理的に言えば(a)は主体(たべた人)、(b)は対象、(c)はそのいずれにもとれるアンビギュアスな文である。しかしこれらのちがいは「被」やその他の特別な手段であらわさ

れているわけではない。まったくSの位置にくる名詞の語彙的意味の差に依存しているだけである。「魚」はみずからが食べる主体にもなれば、食べられる対象にもなれることからふたつの解釈が成立したにすぎない。(『日本語と日本語教育』— 文法編—四九ページ・文化庁・昭和六十年)

この大河内の説明からもわかるように、「NV」が「自然受動文」構造であるかどうかは、語彙の意味に基づく論理関係から判断された結果にすぎない。すなわち品詞による言語形式に依存するのではなくて、「意味」によって構造関係を判断しているのである。これは、言語形式を意味より大事にしている現代言語研究の基本姿勢とは矛盾した現象であると言わざるを得ない。

さらについで言えば、「意味」によって構造を判断するところから、次のような問題が起きている。

望月八十吉は、『新華字典』及び『現代漢語詞典』に載っている「解放」の説明によって「自然受動文」とされている「某国人民解放了」へ「某国の人民が解放された」を「某国人民が自由の身になった」と訳し、それが受動文でないという判断を下している(『日本語と中国語の対照研究』第8号・十ページ・日本語と中国語対照研究会編・昭和五七年)。いわば「SV」構造として理解するということである。

香坂順一は被害感がないという理由で「工作完了」へ仕事

がやりおえられた」 「房子焼了」へ「家が焼かれた」が受動文でないと判断している(『中国語学の基本知識』二八六ページ・光生館・昭和四六年)。

望月は「門開了」を「SV」構造(戸が開いた)と説明しているが、潘金生は「窗子開了」を「自然受動文」(窓はあけられた)と分析している。

意味によって構造を判断すると、主観的な判断になりがちではあるので、認識が違ふという結果になるのはむしろ当然のことであると見える。しかし、文法範疇に属している統辞論が、意味によって説明しなくてはならないのは、品詞による文構造分析の頼りなさを物語っているのではあるまいか。

また、潘金生は、「(自然受動文は) 外国人にとってはちよつと判断しにくい」(『金田一春彦博士古稀論文集』五三〇ページ)「中国語独特の内的受動文は、外国人にとつて前後の関係で判断するよりほかにないとおもう。」(同前五二九ページ)と言っているが、大河内も指摘しているように、「魚吃了」という文だけでは、魚がなにかを食べるのか、なにかが魚を食べるのかどちらであるのかを決められず、いったいどういう構造であるかを判断するのは、外国人だけでなく中国人でも判断できないであろう。この事実、品詞よりもその文を取り巻く場面(王力が言っている言語環境か——中国語法理論八六ページ・新華書店・一九五五年)を認識するのが大事であることを示しているのではあるまいか。

『この「一個人」や「一張地図」は「来た」人、「掛かって
いる」ものそのものである。もちろん動作の及ぶところではな
いし、またその延長線でなんとか考えられる性質の物でもない。
さききのべた語序の基本「s・v・o」から考えれば、動作主
体が後にくるわけで、きわめてドラスチックな目的語といわな
ければならないが、けつして中国語として珍しいものではなく、
常用されるもののひとつである。』と説明している（『日本語
と日本語教育』—文法編—五三ページ）。（傍線は朱廣興）
なるほど具体的な例で説明されてはいる。しかし、一つも品
詞によって説明されていないのである。

さらに言えば、「人や事物の存在・出現・消失の現象を表す」
とは品詞（言語形式）と関係なく、その文の持っている意味の
ことをさしていると理解してもよからう。

このように、品詞のかわりに意味によって構造を説明すると
いうことは、構造（文法範疇）と意味（意味範疇）とを混同し
ていると言わざるを得ない。

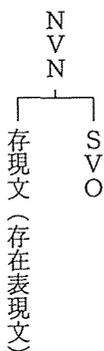
「人や事物の存在・出現・消失の現象を表す」という定義で
あると、地球上の現象がすべてこの説明に含まれてしまう気が
するが、それは今は問われたいとしても、それでも結局は「意
味」に頼らざるを得ない現状が、やはり中国語の品詞が構造を
決める働きを持っていない事実を端的に示していると考ええる。

結局、「自然受動文」の場合と同じく、ふつう「動作主格あ
るいは対象格の名詞と動詞との位置関係が通常の文と逆になっ

ている」と説明される「存現文」の構造関係も、品詞のかわり
に、理解した文の意味によって判断された結果である。

文法学者、趙元任は「講堂上坐着美国学生」「地下睡着两隻
狗」のような文を「存在を表す主語倒置文」と称している（趙
元任『中国話的文法』三三八ページ・丁邦新訳中文大学出版社・
一九八七年）。このようなものを無主語句という研究者もいる
が、いずれも品詞による分析の結果ではなく、意味上から分類
しているものである。

結果として、「NVN」の語順でありながら次のような二通
りの場合が存在することとなる。



丙、慣用文と分類されるもの

品詞によって構造分析できない文が「自然受動文」や「存現
文」などと言われるもののほかにまだたくさん存在している。

しかし、これらの構造関係に名前をつけてゆくとすると、ケ－
スパイケースのような結果を招き、原則のある分類とはならな
くなるおそれがあるので、さしあたり一括して「慣用文」と呼
んでおくことにする。結論を先に言えば、もちろんここでも品

詞が本来持つべき働きがまったく見られない。これらの構造分析において、品詞によるのではなくて、どれほど「意味」に頼っているかを以下に論じる。

比較しやすくするため、同じ構文でも語彙の意味的な差によって「SVO」構造とされるものがある場合、その例文（*印を付す）も併記することにする。たとえば例文22の場合、「吃大碗」に対して「我吃飯（SVO構造とされる）」の例文を挙げ

21 吃 食堂。食堂で食べる。 五二

22 吃 大碗。大きな碗で食べる。 五一

*我吃 飯。めしをたべる。 五一

23 洗 凉水。冷たい水で洗う。 五一

*我洗 衣服。衣服を洗う。 五一

24 現在只剩下八千包啦。 五三

いまはただ8000包がのこっている。

25 他只剩下半碗飯。

かれはただ半碗の飯をのこした。

26 三個人坐一条凳子。

その3人は一つのいすに座る。 六三

27 一条凳子坐三個人。

ひとつのいすに3人座れる。

28 小明三歲死了父親。

小明は三歳のときに父がなくなった。二九

29 死了心。彼は断念した。 七四八

30 我晒太陽。ひなぼっこをする。 四三

*他晒棉被。彼は布団を干す。

31 農夫在海边終日吹着海風。 四一

…一日中潮風に吹かれている。

32 他吹電風扇(冷氣機)。 四八

…扇風機(冷房)にあたる。

*我吹笛子。私は笛を吹く。

33 我們淋了雨了。私達は雨に濡れた。 四九

34 雨淋了我們。雨が私達を濡らした。 四五

35 別打歪主意。変な気をおこすな。

36 打秋風。金銭の援助を求め。 一三七

37 我在籃球場打後衛。：(バスケットボールの)「後衛」を勤めている。

38 他在足球場踢中鋒。(サッカーの)センターを勤めている。

38 他在足球場踢人。彼は球場で人を蹴る。

39 他唱小生。かれは小生の役を演じる。

*他唱歌。かれは歌を歌う。

40 他讀大学。かれは大学に行っている。

*他讀日文。わたしは日本語を勉強する。

41 這兒坐男生、那兒坐女生。

ここは男性が座り、あそこは女性が座る。

42 這橋不能走人。

この橋は人が渡ってはいけない。

43 老張來了電話。張さんから電話が来た。

44 老張、你來了電話。

張さん、あなたの電話ですよ。

45 來一瓶啤酒。ビールを一本ください。

46 先來一瓶啤酒怎麼樣？ まず酒を一本注文したら。

47 他出門了。 かれが出掛けた。

48 他出事了。 かれには事故がおきた。

49 他出車禍了。 かれは交通事故にあつた。

* 我出錢。 金を出す。

50 十斤米可吃十個人。 十斤の米が十人食べられる。

* 十個人可吃十斤米。 十人が十斤の米を食べられる。

51 這菜很下飯。 このおかずが食欲をそそる。

52 他在烤火。 かれが火にあたっている。

* 我在烤玉米。 とうもろこしを焼く。

このように例文が数多く存在しているにもかかわらず、従来
の研究では例外扱いにされているのである。しかし、私が挙げ
た右の三十以上もの例がすべて例外であるというのはおかし
ではないか。一つや二つなら例外といえようが。

では、なぜ例外扱いとなっているかと言えば、SVO構造を
原則として立てたばかりに、その原則に適合しないときは、説

明のしようがないから例外としているのではなからうかと考
える。つまり、中国語の文に即して規則を抽出したのではなくて、
はじめに規則を作り、いや、厳密に言えば、欧米諸言語文法を
模倣して、それら諸規則によって中国語の文を分析しようとい
う無理なことをするための結果であらう。

そこでさらに踏み込んで言えば、品詞の代わりに意味だけに
よって構造を説明すると、次のような新しい問題がおこる。

A、意味の理解に左右される構造

「吃食堂」は「食堂」という語自身の意味によって「場所」
であると判断されるが、「吃公司、睡公司」の場合、「会社が
食事と寝る場所を提供してくれる」という意味で使われる。し
かし、「吃食堂」との構造の違いを品詞によって説明すること
ができない。

「吃」「洗」を使う表現に対して大河内は次のように説明し
ている。

〈吃飯〉は〈めしをたべる〉ことであり、〈洗衣服〉は〈衣
服をあらう〉ことで、対格目的語であるが、次(上記例22、23
のこと)は「食べ」、「洗う」ための道具である。……………
「吃飯」と「吃大碗」はかわりなく、目的語になる個々の単語
の意味的な差がもたらすものといわなければならないだろうか。

〔『日本語と日本語教育』—文法編—五一ページ・文化庁・昭和六十年〕

このように、単語の意味の差が構造を左右する事実を認める。例24、25の構造の違いについて大河内は次のように説明している。

「これは主語になる語が生物であるか。時間であるかの差としてとらえられるにすぎない。」（同前五三ページ）

又例26、27について、こう説明する。

「a（例26）の「三個人」はかならず話題にのぼっていた「3人」でなければならぬが、b（例27）のようにいうこともできる。この場合は「ひとつのいすあたり任意の3人が座れる。」の意味になる。ともあれaは「3人」についての主題表現であるが、bは「ひとつのいす」についての主題表現ではない。」と。

杉村博文は、論理的な根拠のないまま、「這種布怕晒太陽」（この手の布は日光浴を嫌う）という文が成立しないと判断し、それで、「（吹風）や（太陽）が（人）の場合にしか使えなかつた」という結論を出している。

すると、いずれも意味による主観的な説明であり、品詞によって〈文法的〉に論理的に説明されたものではない。

B、場面などに左右される意味

「妹妹吃了」が簡単に「sv(o)」であると判断されることに対して「主語」が同じ生物であるにもかかわらず、「魚吃了」の構造が異なる二つの意味の可能性があるということはすでに述べたとおりである。この違いは完全に場面の設定のしかた如何によって生じたものであり、品詞によって〈文法的〉に論理的に説明することができない例である。

現実の世界では、「妹妹吃了」は「なにかが妹妹を食べた」よりも「妹がなにかを食べた」という場面のほうが想定しやすいが、「魚吃了」になると、「なにかが魚を食べた」あるいは「魚がなにかを食べた」のいずれの場面も想定できるから、文脈や談話状況などをてがかりにしないと場面の決定は不可能である。いわば、場面を設定してから、はじめて意味の理解ができ、その後文構造の説明が可能になるということである。そこで場面を設定して大河内の説明を考えてみることにする。

大河内は、「碗」「水」だから、道具であるという極めて単純な推理で「吃」「洗」の目的語でないと判断しているわけである。言わば、凉水や大碗が、目的語でなく、道具であると理解されたのは、なにかの文法的且つ理論的な根拠があるというのではなく、単なる語彙の意味から判断された結果である。形式的に「碗」などを道具となるものに入れ替えたらずべて同じ構関係になるということがないかぎり、それは単なる道具として（すなわち意味として）理解されていることを示している

るだけであって、道具が動詞の目的語になってもいいという説明を規則として認めるわけにはいかないであろう。

さて、「凉水」・「大碗」が道具であると理解されているが、それでは果たして、「お碗で食べる」ことを「我吃碗」、へ水で洗う」ことを「我洗手」と言うのであろうか。またこの結論の延長線で考えると、「我吃筷子（盤子）」〈私はお箸（お皿）を食べる〉「我洗手（刷子）」〈私は手（ブラッシ）洗う〉の「手」「刷子」は道具として理解されるはずがないと言えよう。風呂の湯加減を聞かれた時、「我洗冷水」と答えたら、「冷たいお風呂がいい」ということであり、「冷たい水でなにかを洗う」ということではない。この文の重点は「冷水」の「冷」にある。つまりこの「冷水」は単なる水温の違い（凉水・冷水・温水・熱水など）を区別するためのものであって、「道具」を意味するものではない。

ラーメン屋で店のご主人に「我吃大碗」といったら、それは「わたしは大盛りを食べる」ということである。「わたしは大きな碗で食べる」という意味ではない。この「大碗」も「冷水」と同じく、「大碗」の「大」に重点がある。それは「量」の違い（小碗・中碗・大碗）を区別するものであり、道具の意味を表しているのではない。

「大瓶、中瓶、小瓶」・「大杯・中杯・小杯」（ジュース・牛乳等の場合）、「大盤・中盤・小盤」（ビーフン、やきそばなどの場合）などもこの類のものである。

だから、場面を設定して考えると、水の温度や量の違いを示す「凉水」「大碗」が、いずれも大河内の言っている「道具」と違うものになる。

例24、25は同じ「剩」を使っているが「主語が生物か時間かによって構造が違ってくる」と説明されている。

これは意味の違いに加えて、場面を想定して、それによって判断した結果であり、別に品詞に基づいての文法的な理論的な説明であるとは思えない。またなぜこんな意味的な違いによって構造がかわるかと更に問い詰めても、それ以上の説明をもう期待することはできないであろう。いわば、両者の構造が違うという説明は、「主語」の意味と前後の文脈とによって判断された結果にすぎず、品詞に基づき、理論的に立証されていないものであるからである。

殆どの友達に見捨てられた人の状況を「彼には、ただ一人の友達しか残っていない」と説明する場合、主語が生物であるにもかかわらず「他只剩下一个朋友」と言うべきではあるまいか。〈彼はただひとりの友達を残した〉（SVO）であると考えていいのか疑問である。この文構造の場合、「朋友」を「妻子」に換えると、どうなるのか。〈彼は妻子を残して外国へ逃げた〉という意味で「他剩下妻子、逃到外国去了」とは言えないであろう。もし、あえて言うならば「他留下妻子・」であり、「剩下妻子」は「妻子が残っている」という意味である。

例26、27の坐に関して主題表現であるかどうか、話題の人間

であるかどうかの大河内の説明には、なんの論理的な根拠もみられない。

「一つの椅子に3人座ったら、一五〇人収容できる。」という不特定な三人の場合、「三個人坐一張椅子、可以容納一五〇人」のような表現を使つてはならないのであろうか。もし、大河内の説明が正しいとすると、「兩個人打一個人」へふたりがひとりを押く」と「一個人打兩個人」へひとりがふたりを押く」とをへ「特定の二人」が一人を押く」とへ「任意の二人」が一人を押く」と考えなくてはならないことになる。

「小明三歳死了父親」(例28)のような表現になると、その構造を品詞で分析できそうもない。むしろこれはただ中国人の理解した内容を全体としてそのまま受け継いだにすぎないと言えよう。「他死了心」へ彼は諦めた」となると、「意味」によつて「死心」を「VN」とみるべきか、それとも「複合名詞」とみるべきか、また論議を呼ぶところであらう。

「来」を使う文などの、全ての慣用文の構造において、品詞がまったく無用であることは言うまでもないことであらう。また慣用文についていろいろな説明が見られるが、実は、すでに理解された意味をあとから説明しているだけのものが殆どであり、規則にまで発展できる論理的なものではないと言つて過言でない。

上記の事実は、中国語の場合、文をまず正しく理解するため、その文が使われる場面を正確に把握しなくてはならないこ

とを示していると思う。

スウェーデンの言語学者、カールグレンの説明には興味深いものがある。「這須要一種揣測的工夫、或者母寧就說是必需對中國人如何造句、如何用語表現他們頗有體驗。必須要瞭解中國人的心靈、只有一條路：読書、反復的読、読到能使自己習慣於中國人的思想法、直到能自動像中國人一樣的思想」(『中國語之性質及其歷史』六一ページ・國立編譯館中華叢書編審委員會・一九七八年)

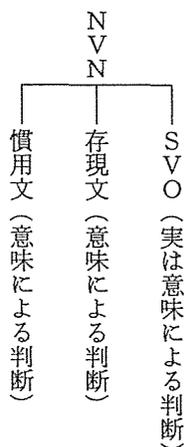
以上の検討により、次のような場合が得られる。

NVN | SV O
慣用文

三、意味にたよる構造分析

ここまで述べてきたことを総括してみると次のような結果が得られる。

NV | SV (実は意味による判断)
自然受動文 (意味による判断)



上記の表について、さらにA、Bに分けて説明することにす
る。

A、言葉の位置だけを示す品詞

中国語の場合、いろいろな構造のなかで、「SV」「SVO」
構造だけが品詞によって分析されているようにみえるが、上記
の表を見るかぎり、NVだからと言って必ずSVになるとか、
NVNだから必ずSVOになるといふ必然的な関係があるわけ
でないことがわかる。

たとえば、一般に「他吹笛子」と「他吹電風扇」とは構造的
に違うものとされているようであるが、もし形式によって分析
するとしたら、それが「SVO」構造であるかを見分けること
はできない。それらの構造が違うと判断されるのは明らかに
「意味」によるものであり、「形式」とは無関係である。

結局、品詞によってわかる構造はなにか一つないということに
なる。

こうして見ると、語と語との関係を示す働きもっている日
本語や英語の品詞と違って、中国語の品詞はたんに言葉の位置
を示すものにはすぎない。すると、語と語との関係を限定する働
きがないから、品詞論→統辞論という文法体系に基づいて「某
国民解放了」が「SV」か、それとも「自然受動文」である
かということの説明することは不可能である。

望月が理論で説明することができず、用例を記した辞書ごと
きの（無署名の）説明を引用して（その態度自身が非学問であ
るが）自分の判断した結果を証明せざるを得ない最大の原因は
ここにあると言えよう。

望月は「門開了」を「SV」（戸が開いた）と説明するが、
潘金生は「窗子開了」を「窓が明けられた」と説明する。これ
は理解した結果が違うということを示しているにすぎず、品詞
によってどちらの立場が正しいかということを立てることが
できない。場面を設定しないかぎり、「他断了腿了」がいった
い「かれは足を切断した」ということなのか「かれは足が折れ
た」ということであるのかという論争をしても無意味なこと
であり、結論が出るはずがない。

B、意味範疇と文法範疇との混同

前述してきたように、中国語の場合、品詞は言葉の位置を示
すものの、語と語との関係を限定する働きをもっていない。だ

から、理解した意味（正しいかどうかは別として）によって構造（統辞論）を説明しなくてはならないのが実情である。もし違ふ内容と理解されたならば、その構造も当然違ふと説明されるのが現在の大半の研究である。「SV」や「SVO」などの構造とは、すでに理解した意味をあとから説明するための手段にすぎない。この事實は小川環樹の『漢文入門』にある次の説明からもはっきりとわかれる。

「漢文に品詞の別があるかないかはむづかしい問題である。もしあるとすれば、その区別をいかに定義すべきかを決定しなければならず、品詞の区別がないとすれば、漢文の文法を説明することが非常に困難になる。われわれはこの書物では理論的な、あるいは根本的な解決を試みようとはしなかった。ただ漢文を解するのに最も便利と思われる説明をそれぞれの個所において述べておいた」（『漢文入門』三六六ページ・岩波書店・一九五七年）

「他吃飯」はその「意味」において「彼が御飯を食べる」と理解されたからこそ、そういう意味を説明するために「最も便利と思われる」手段として、英文法の「SVO」構造を使っているだけのことである。

そして「他吹電風扇」や「他死了父親」などのような文の場合、適当な説明方法がみつからないため、説明しようがないとされているのであろう。

しかし、文法範疇と意味範疇との混同を厳しく戒める現行の

言語研究においては、意味が形式よりも大切であることは、実はあつてはならないのである。したがって、たとえ「意味」の説明において、たまには英文法の「SVO」構造を適用できるとしても、それは意味を説明する便宜的な手段にすぎない。すなわち、かりに英語「I love you」（SVO）で、中国語「我愛你」という文の意味を説明することができるとしても、意味範疇と文法範疇との比較は無意味なことであり、また不可能なことであると言わざるを得ない。「中国語の語順はほぼ英語とひとしく、述語動詞の前に主語、後に目的語ということになる」という説明はまさに意味範疇と文法範疇とを混同しているのである。

おわりに

意味範疇と文法範疇とを厳格に区別するのが、品詞論↓統辞論という文法体系に基づく現代言語研究の基本姿勢であるとしながら、中国語の場合、品詞のかわりに「意味」によって構造を説明しているのが現在の中国語文法研究の大勢である。これは研究方法として基本的に誤っている。

とすると、この誤りを認めて、品詞論↓統辞論という従来の西洋文法体系にこだわらずに、理解した意味を説明するための手段を考えるよりも、或る語順が場面（語言環境）とどう関係しているか、つまり、どのようにして「意味」を正しく理解す

ることができるとか、という方向に転じて中国語の文法研究を進めるべきではなからうか。いわば中国語の言語事実に基づいて、それに相応しい文法体系を作るべきではないかと思う。

そこで、私はこの次に中国語に品詞論が必要であるとされる原因はどこにあるのか、また従来の品詞分類はどのように行われたかといった点を課題としてさらに研究進めたい。

〔注〕

一、各例文には、番号を付している。

① 1～2 張志公著 香坂順一訳 江南書院出版『中国文法基礎』（一九五五年）

② 3～8 潘金生「中日両国語の比較―次動詞（被動）を使う受動文と意味上の受動文をめぐって―」『金田一春彦博士古稀論文集』（昭和五九年）

③ 15～17、21～27、44 大河内康憲「日中対照文法論―主語及びそれとかわる問題―」文化庁発行『日本語と日本語教育―文法編―』（昭和六十年）

④ 12～14 C、E ヤーホントフン著 橋本万太郎訳白帝社出版『中国語動詞の研究』（昭和六二年）から（訳文は

朱廣興）

⑤ 10～11 18～20 大河内康憲「中国語構文論の基礎」明治書院出版『講座日本語学10外国語との対照研究I』（昭和五七年）

⑥ 9、28 望月八十吉「日本語から中国語を眺める―その2―」大阪外国語大学中国語学研究室内日中語対照研究会発行『日本語と中国語の対照研究第8号（昭和五七年）』

⑦ 29、36 鐘ヶ江信光 大学書林出版『中国語辞典』（昭和四九年）

⑧ 30～34 杉村博文「吹風攷―神戸大学教養部中川正之研究室内 日本語と中国語対照研究会発行『日本語戸中国語の対照研究第10号』（一九八五年）

それ以外の例文は朱廣興が作ったものである。

二、自然受動文と分類される言語表現と「被」を使う言語表現とはまったく違うものであるから、両者の間にどれが自然であるかという比較をするわけにはいかない。詳しくは拙論「中国語動詞の自他性」（大阪大学文学部日文学科編『日本学報』第7号・昭和六三年）を参照されたい。